

第19回 堀明子詩集『四季の色』展

後援：三田市教育委員会、兵庫県教育委員会

詩集『四季の色』の詩は、小学3、4年のときに、草花を愛で 風を 雲を、そして雨を、そのときどきを感じながら 四季のありさまを書きとめています。

*** 開催期間**

2009年3月20日(金・春分の日)
～4月26日(日)

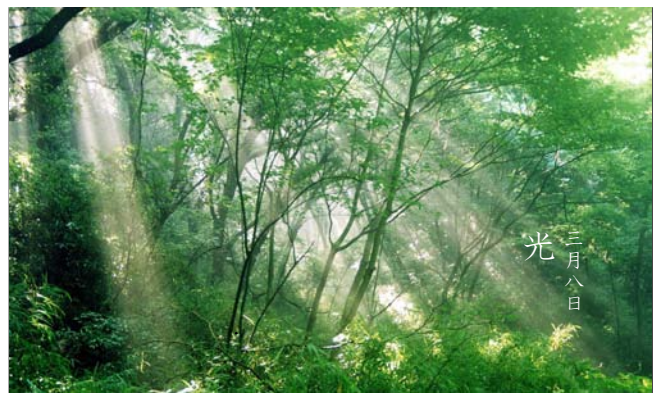
*** 展示場所**

3階 オープンギャラリー
4階 ひとつはくサロン

*** 展示品**

詩集『四季の色』からの詩に写真を添えたパネル 約80点など。

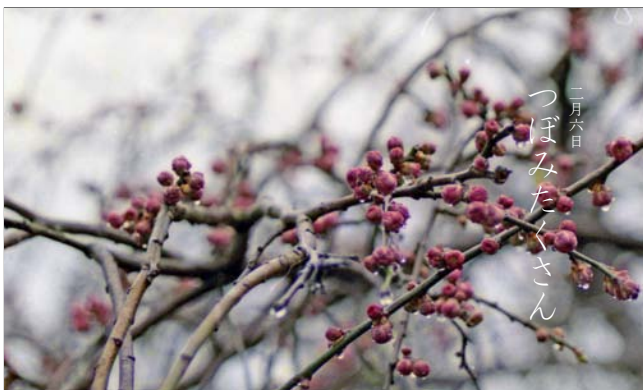
詩集『四季の色』ホームページはこちら
http://www.geocities.jp/sikino_iro/index.htm



光は空から
おりてくる
かがやく光
かがやく光
にじの色
光は七色
かがやく光
光はてらす
小さな地球を
かがやく光

この自然を 子ども達に 孫たちにのこさなければと・・・明子さんの声が聞こえます。

第12回展・会場メッセージ



つぼみたくさんさん
もうさきそうな
大きなつぼみも
もつとあつたかくなるまで
じつとまつている
小さなつぼみも
いつかつぼみたくさんさんが
花たくさんになるだろう
早くあつたかくなあれ
きれいな花に
かわいい花に
つぼみたちがなるように

春を待つ固い蕾つぼみのなかには、それ自体の美しさと同時に、象徴的な美と神秘がかくされています。

レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』より

■ことし編まれた詩集をいくたびも開き、自然の素晴らしさをとらえる感受性のみずみずしいことに打たれた。

1989・12・29 朝日新聞 天声人語



本当はアゼカヤツリ
でもずっとわたしは
花火草っていついた
そのほうが合っているし
わたしもその名が好きだから
せんこう花火のような
その草がすき
だってその草が
道ばたに見られるようになる
水泳だって花火だって
できる季節になったってことが
はっきり分かるから

草や花たち、その名前や過ぎゆく時への共感や愛情など、無心な子供の心にそんな細やかさで映るのか、と息をのむばかりでした。

作家・辻 邦生さん

■詩の多くは花をうたう。そして木や鳥や虫や空のことも。

2002・10・7 朝日新聞 天声人語